

京都工芸繊維大学名誉教授 中村昌生

京都迎賓館は和風の建築で、日本人のもてなし方で、国公賓を接遇するためにはじめて建設された国の施設である。建築は「現代和風」を基調とすることになり、日本建築の伝統と現代の建築技術とを融合する設計によって、建物と庭を一体化した「庭屋一如」の現代和風が結実された。その日その時の客を迎えるにあたり、室礼・調度にまで心をこめるのが「和のもてなし」である。そのため国交省は、意匠・家具調度に至るまで、伝統的技術の粋を傾注することに尽力された。

建設の過程でこの施設の公開は予想されていなかったが、「和風」が「純和風」でなくなりつつある現代、国が和風で賓客をどのようにもてなすかを、国民に知らせることは重要と考える人も少なくなかった。一般公開が始まった意義は大きい。

拝観希望者は私の予想を超え世人の関心の高いことに安堵した。赤坂迎賓館と両方の拝観が出来ることは、京都迎賓館の理解を深めることになり、有意義である。なお現行の拝観料は適当と思う。

拝観をさらに魅力あらしめるために、館では種々検討されているが、私の提案したいのは、迎賓館に鑲<sup>ちりば</sup>められた各種の伝統的技術「匠の技」（漆芸・截金・鍔金具・木工・織物・和紙・建具・大工・左官・庭師等）を特に外国人に伝えたい、そのため迎賓館で作品を観た人に工房見学の希望を募る。各工房側へも見学者への対応を要請する。将来的には共同の工房を収容できる展示館を計画した方がよいかも知れない。迎賓館の一般拝観は、日本人の生活文化を伝えるだけでなく、誇るべき匠の技を世界に知らせる絶好の機会でもある。

桂・修学院離宮の一般公開は、これまで最も敷居が高かっただけに、観光への寄与も大きい。そして京都御所等と全く異なる貴族の山荘である。

舟遊びの出来る大池を掘り、その周辺に御殿、茶屋等を配して、それらを苑路でつないだ桂の山荘は、建物と庭が一体化されている。庭園は、他の公開庭園とは異なり、各建物が飛石や石畳の苑路で連結され、「茶の湯」の露地と同じ構成・手法で形成されている。拝観者には予めそれを説明し、露地草履に代わるゴム底の履物を用意すべきである。（先例あり）それでも苑路の破損は防ぎがたく、拝観料を収受、補修等に充てるべきである。

このような「庭屋一如」の構成は、古代からの日本人の生活と住居を貫いた「伝統」であった。修学院離宮も全く同じである。一般公開の解説を通じて、この事実を強調してほしい。

この「庭屋一如」の伝統は京都迎賓館の設計に継承されたのである。

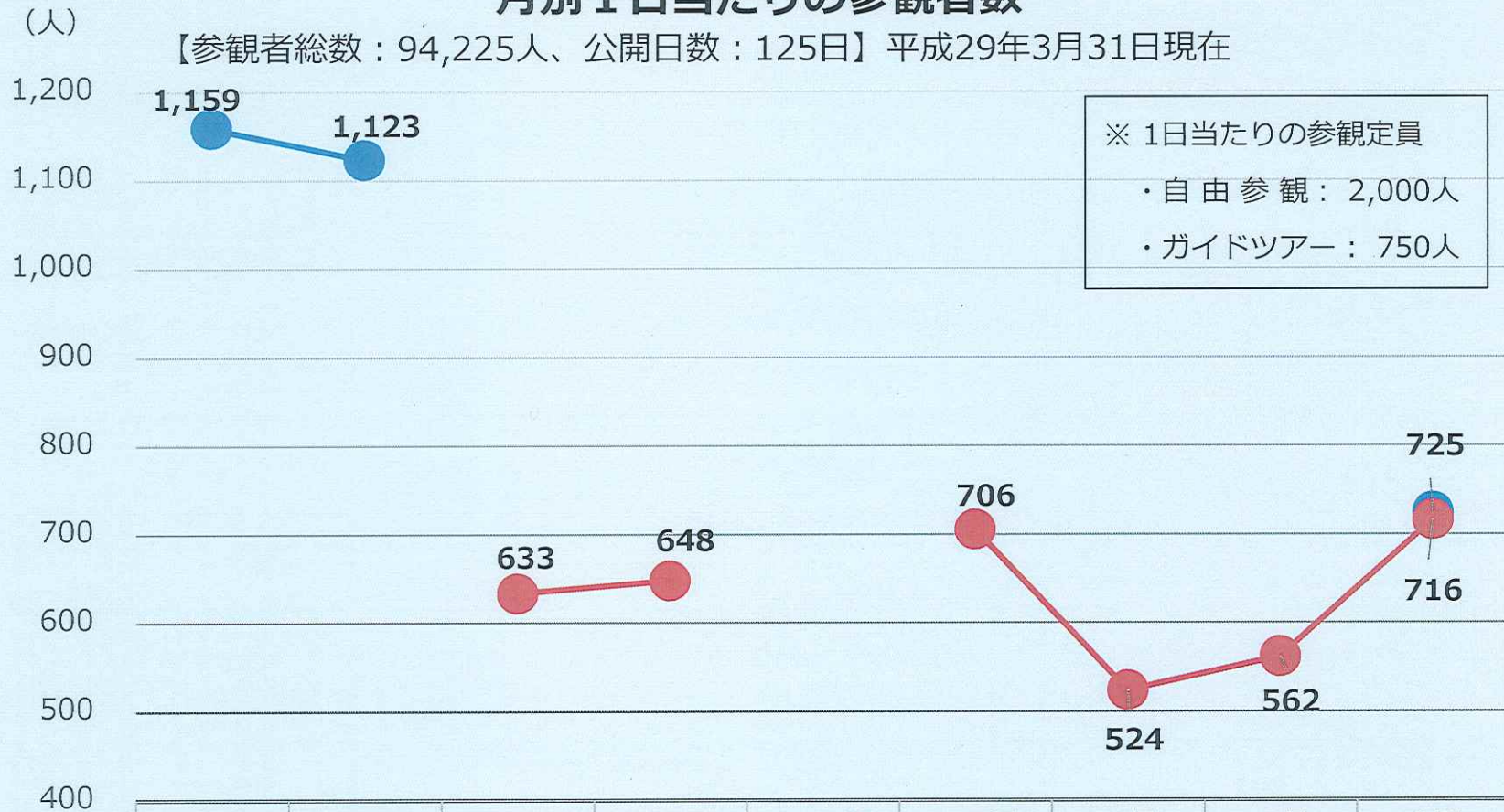
東山の翠巒を間近に白川の流れる岡崎の地は、平安貴族の山荘の地であった。中世に南禅寺が建立され寺観を誇ったが、近代に塔頭の多くが民有化となった。琵琶湖疏水が生まれ、山と水に恵まれたこの地に、競って山荘が営まれた。富と教養豊かな施主の構想を受け、建物や庭の匠たちが築き上げたのは、みごとな「庭屋一如」の山荘で、近代和風の名作として重文や名勝に指定されているものもあり、南禅寺界隈の山荘群として内外に知られるようになっている。

多くは個人所有で、直ちに一般公開はむつかしいが、特別観光資源として活用の方途を検討すべきであろう。

# 平成28年度京都迎賓館一般公開

## 月別1日当たりの参観者数

【参観者総数：94,225人、公開日数：125日】平成29年3月31日現在



※ 1日当たりの参観定員  
 ・自由参観：2,000人  
 ・ガイドツアー：750人

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
自由参観	1,159	1,123							725
ガイドツアー			633	648	接遇のため、 一般公開は実 施せず	706	524	562	716

平成28年度京都迎賓館一般公開の参観者数及び参観料収入について（実績）  
（平成28年7月21日～平成29年3月31日）

1. 公開日数	125 日
(1) 自由参観	41 日
(2) ガイドツアー	84 日
2-1. 参観者数	95,310 人
(1) 自由参観	43,609 人
(2) ガイドツアー	51,701 人
2-2. 1日当たりの参観者数	762 人
(1) 自由参観	1,064 人
(2) ガイドツアー	615 人
3-1. 参観料収入	112,292,300 円
(1) 自由参観	40,963,700 円
(2) ガイドツアー	71,328,600 円
3-2. 1日当たりの参観料収入	898,338 円
(1) 自由参観	999,115 円
(2) ガイドツアー	849,150 円

